



シンポジウム

「続 声・共鳴する身体から台詞へ」

5月24日（金）17：15～19：00

〔パネラー〕 ナディーン・ジョージ ロラン・クルタン

〔ゲスト〕 和田喜夫

〔通 訳〕 石川麻衣 山上優

65

○**山上** 改めまして、皆様ようこそ。2017年、この声に関するワークショップの第1回に講師として来て下さいましたロラン・クルタンさんからお言葉をもらってスタートしたいと思います。

○**ロラン** 皆様、本日はお集まり頂いてありがとうございます。そしてこのワークショップをコーディネートして下さった日本演出者協会の皆様にも感謝申し上げます。もう一度ここに来てワークショップができたことを、とても嬉しく思います。何年前かに（山上）優がパリで私のワークショップに参加したことがきっかけで、2年前に初めて、日本でワークショップを行うことができました。そして今回、私たちが実践しているワークを構築したナディーンと一緒に日本に来ることができ、言葉がありません。何度もありがとうございますと言いたいです。

○山上 ここからの時間をシンポジウムと予定していましたが、今回のワークショップを毎日視察され、今日はウォーミングアップにも参加して下さった理事の和田さんと相談しまして、ナディーンさん、ロランさんからもっとお話を伺うのが良いと判断しました。皆さんとシェアしたいことを質問形式で進めたいと思います。進行を和田さんをお願いします。

○和田 ゲストに呼んでいただいた和田です。セミナーに参加できなかった皆さんにも、今回の出来事をお伝えできればと思っています。そのような質問をする形で進めますが、まずこのセミナーの説明から始めさせていただきます。国際演劇交流セミナーを始めたのは1999年。海外でどんな演劇がどんな社会状況の中で行われているか知りたいけれども、なかなか簡単に海外には行けない。でもどう



にかして知りたいというところから、文化庁と相談して始めました。その第1回目は、カナダの五大湖の北に住んでいるクリー族、ネイティブカナディアンの劇作家トムソン・ハイウェイさんがゲスト講師でした。ネイティブの人の演劇に対して、先進諸国よりレベルが低いというイメージがあるのではないか。そして、自分の中にもそういう偏見があるかもしれないという反省もあって、彼らのことを知りたいと思ったんです。

ここからが今回のセミナーにつながるのですが、トムソンのレクチャーにおいて、言葉や声の問題が大きく語られました。彼らが本来持っているのはクリーの言葉。そして白人同化政策後のあの国で暮らすにあたって教えられ身につけたのが英国の言葉。彼らは両方を学ぶわけですね。クリーの言葉には文字がないんです。彼らは一体どういう会話をしているのか。トムソン曰く、「お腹の底から毎日一日中面白いことを言い合っている」のだと。そして、彼らが教えられた「欧米の言葉、英語は、喉から上で発している印象がする」と。それはとても大きな問いかけでした。自分も演劇をやっていると、いつも声が気になるんですね。それは本当に自分の声なのかなと。我々の声はどんなものなのかなと。

今回、国際セミナーを始めた第1回目に抱いた疑問に、20年経って再び向かい合うことができたのは、本当に幸せなことでした。2年前ロランさんが来てくださった時、仙台からの参加者のセミナー後のコメントに、「突然涙を流される参加者がいた」という内容があってとても驚きました。そして、他の参加者の方々のコメントも読んで、ぜひもっと詳しく知りたいなと思ったんです。今回参加してみて、全部を分かったわけじゃないけど、ああ、そうなのかな、ということを経験も発見しました。「人の声の

中には個人を超えた何かがあるはずだ」とナディーンさんがおっしゃっていましたよね。「あなたの声の中におばあちゃんがいる」とか「もっと深いなにかがいるね」とか。1日目、2日目で参加者全員がそれにトライしていました。涙を流された方も数人いらっしゃいました。「少女のころの声に再会した」という理由が印象に残っています。あと現在日本では、声を出さない子供達がめちゃくちゃ増えている。これは社会的な問題で、それをどうするかという話も今日皆さんとできればいいなと思っています。

私は島で育ったのですが、成長するとともに自分の思っていることと、体が装っていることがずれてきたんですね。島なので監視されているような状況が多く、変な噂が流れたりするので、思っていることを全て言うのが怖いです。例えば性の目覚めがありますね。だけどそれを誰に聞いたらいいか分からない。心の中にはあるんですよ、膨大な言いたいこと、訊きたいことが。それが言えないと、心と体がバラバラになる。外へ出すことで世界に参加できると思いながら、それができない。声とはなんなのか。世界と繋がる橋なのか。声を出すことで、人間は世界と繋がろうとしていると思うんだけど、それは誰にとっても時にはとても怖いことだと思う。そのことについては、ロランさんもナディーンさんもかなり言われていました。

演劇は、その怖さを解放するためにあるのではないかと思うんです。例えば声だけじゃなくて、身体的な表現もそう。実のところ身体はこうしたいんだけど、それを町の中でやると変な奴だと思われる。でもそういったことをやるのが演劇なんじゃないか、演劇はもっと自由なものなんじゃないかということを僕は思ってたんですけど、ロランさんやナディーンさんがやっていることは、まさにそういうことなんだと強く感じました。だから今日は色んな質問をしたいのですが、先ずナディーンさんに、女優という仕事から入られて、ロイ・ハートさんと出会い、声に興味を持っていった過程についてお話を聞きたいです。

○ナディーン まず和田さんのおっしゃったことがとても興味深いなと思いました。外的な世界とつながることの恐れ。それは日本だけではないと思うんですね。そのことについて話すと、私は7歳の頃、今私が皆さんに対してしているような自己表現がなかなかできない子供だったんです。もちろん喋ることはできたけれど、自分の深い感情を表現することができなかった。それにはあらゆる要因があるのですが、その1つとして、私は12歳まで自分の父親を知らなかったんです。

会ったことがなかった。7歳のとき、その父親が私を私立の学校に送り込んだのですが、私は学校が大嫌いでした。学校の校長が私の母親に、あなたの娘はものすごく荒い声をしてるわね、と言ったんです。子供らしく喋らせるために、喋る訓練を受けさせましょ



うと。その喋る訓練をしてくれた先生から女優の道を勧められ、シェイクスピアに触れるようになりました。

このミッチェル先生は、私の人生を救ってくれた恩人です。自分の内的な深い感情を、シェイクスピアのテキストに乗せてなら表現できた。内気な少女だったので、本当の自分を晒す事が怖かったのです。私は色々な意味で、すごく個性的で風変わりな少女だったと思います。1人で何時間もシェイクスピアのモノローグに取り組んでリハーサルをしていたものですから、両親が当時はとても高価だったテープレコーダーを買ってくれました。私はそのテープレコーダーに向かって自分の声を何度も録音し、それを聞いて自分の声を修正していったのです。私は、放課後まっすぐ自分の部屋に帰ってシェイクスピアのリハーサルをやるような子でした。だけどその過程と時間は私を救ってくれました。その頃の夢は、もちろんイングランドで女優になること。そしていずれはハリウッドに行って、映画に出演したいと思っていました。

17歳の時に、セントラル・スクール・オブ・スピーチ・アンド・ドラマ（Central School of Speech and Drama）という、当時ロンドンでは最高峰と言われていた演劇学校に行き、卒業後にアメリカの小説家ヘンリー・ジェイムズ原作の『鳩の翼』に出演する事ができました。その時に俳優である元夫と一緒にいたのですが、彼がロイ・ハートと付き合いがあったんですね。ロイ・ハートは、人間の声の研究をしていました。ある日私がロンドンに戻った時、元夫にロイのワークを見学するかと言われたんです。そしてロイのワークを見たことで、私の人生がガラッと変わってしまいました。ただ立っている状態であれだけ幅のある声、あれだけの感情的な深みを表現できる人を私は見たことがなかった。あらゆる名優たちの演技を見てきたけれど、ロイのように声を扱う人は見たことがなかったのです。

ロイは3つの音を同時に扱う事ができました。8オクターブの声を出す事ができ、魔笛はどの楽曲も、女性と男性両方完璧に歌いこなす事ができた。つまり私はあの瞬間、天才を目の当たりにしたのです。彼は「傷ついた天才」でした。私はこの人と一緒に仕事をすると確信しましたが、なぜそう思ったのかは分かりませんでした。私はすぐに女優を辞め、ロイと一緒に声の取り組みを行うため、広告会社に仕事を得ました。私は最初、鍵盤の中位の「ド」を全く出す事ができなかったのですが、その時点ですぐに分かりました。私は身体を使えていない。長年ボイスのトレーニングを続けてきたけど、それは私の本当の声ではないということに気づいたんです。その声は、私のイメージに過ぎなかった。私はその後5年間ロイと仕事をし続けて、自分の声の深みに触れることができました。私は今でも、地に足をつけるという作業に取り組んでいます。私は夢追い人でしたが、私の夢は地面と繋がっていませんでした。ロイとの出会いが、私の足を地に戻してくれたのです。そしてその時に、私の人生はがらりと変わってしまいました。

このボイスワークは、ロイ・ハート自身が創り出したものではありません。このワー

クを始めたのは、ドイツ系ユダヤ人の、アルフレッド・ヴォルフソン。第一次世界大戦の残虐性からこのワークは生まれました。18歳の時、彼はすでに兵士でした。2度の負傷を経て再び戦いに加わった時、彼は泥の中に引きずり込まれてしまいました。そこから必死に這い上がろうとしながら、彼は死にゆく兵士たちの叫び声を耳にしたのです。そして、このままだと自分も彼らと同じように死んでしまうと思った。その声は、彼の頭にずっと焼きついて離れませんでした。彼はドイツの病院で身体的な治療は受けましたが、精神的な傷は誰にも治してもらえませんでした。あの戦争に加わった戦士たち全員がそうであったように。その時はまだPTSD(心的外傷後ストレス障害)といったような言葉はありませんでした。アルフレッドはその後ベルリンに戻り、歌のレッスンを受けました。そうする事で傷が癒えるのではないかと思ったのです。しかし、死にゆく兵士たちの叫び声は消えなかった。

彼は人間の声に宿る力を信じ、自分でワークを始めました。そしてそれによって、彼の傷は徐々に癒えていきました。兵士たちの声の根源、その声がどこにあるのかを探る事で、自身の傷を癒し、トラウマを乗り越えたのです。その後彼はベルリンでオペラシンガーたちとワークをしましたが、ナチスの脅威を避け、1939年にイングランドに移住しました。彼の家族は全員アウシュビッツで亡くなりました。しかし彼は引き続き、友人であるジャック・ジョンソンと、ジャックの娘であるオペラシンガー、ジルとジェニーと共にボイスワークを続けました。ロイがアルフレッドとワークを始めたのは、1947年のことでした。

アルフレッドと同様ユダヤ人であったロイは、南アフリカのヨハネスバーグのとでも裕福な家に生まれました。ロイの祖父はロシアからの亡命者で、シナゴークを開いていました。ロシアでもユダヤ人は迫害されていたからです。ロイはヨハネスバーグ大学で心理学を学び、演技を始めて役者になると決めました。そしてスカラシップを得て、ロンドンでも最高峰と言われている英国ラダ(RADA)の演劇学校へ進んだのです。彼はラダで大変優秀な生徒でした。彼がオセロを演じた時、デズデモーナの首を締めなければならないシーンで、彼は何か足りないと感じました。演技はできるけれど、何か。彼はそれがどうしても気になってしょうがなかった。その時にアルフレッド・ヴォルフソンの存在を知りました。アルフレッドという人が、人間の声で何か不思議なことをやっているらしいということを知ったのです。

ロイはアルフレッドに会いに行き、自身の悩みを相談しました。するとアルフレッドはロイに向かって笑顔で「なるほど。じゃあ君は誰も殺すことはできないんだね」と言ったのです。ロイは「もちろん僕は人なんか殺せませんよ」と答えました。それから2時間ぶっ続けでアルフレッドとロイはボイスのワークをしました。それは、今私がやっていることと比べると、ものすごく強烈なワークだったと思います。あまりに強烈過ぎて、ロイはアルフレッドを殺してやりたいと思った。その時にロイは気付いたのです。自分の中にも殺意があるということ。それからロイの人生はガラリと

変わってしまいました。

ロイはラダの卒業公演でムッソリーニの役を与えられましたがそれを断り、アルフレッドと一緒にワークをしようと決心したのです。それから17年間、彼らは一緒にワークを続けました。そしてロイは、8オクターブ歌えるほどの声を手に入れたのです。ロイは偉大なる芸術家で、俳優としてはもちろん、素晴らしいシンガーであり、音楽家でもありました。私がロイに出会ったのは、アルフレッドが亡くなって1年後のことだったので、私自身は残念ながらアルフレッドと会ったことはありません。ですが、私はロイを通して、アルフレッド・ヴォルフソーンが伝えたかったことを伝えてもらったと思っています。

私はロイと10年間ロンドンで活動をしましたが、全てを捨てて南仏に移動し、47名の団員を抱えたシアターを作りました。床が半分くらいなくて、雨漏りもひどい建物。決して贅沢な環境ではありませんでしたが、美しい場所でした。一番近い村に行くのに1時間歩かないといけなほど辺鄙な場所だったので、どれだけ声を出しても近所迷惑になることはありません。わたしたちは『L' Economiste』という作品を創り、スペインへツアーに行き、フランス中を回りました。ロイは飛行機が大嫌いだったので、どこへ行く時も決して飛行機には乗りませんでした。ある日、私たちはマルセイユの空港からバルセロナへ飛ぶため空港に向かいました。ロイと彼の妻、そして若い女優と私の元夫は、車で移動することになりました。そして私がバルセロナに着いた時、ロイが事故で亡くなったという知らせを受けたのです。ロイは即死、彼の妻と若い女優も亡くなりました。

私や劇団員たちにとって、その経験は非常に辛いものでした。自分たちのリーダーを亡くしてしまったわけですから。私たちは自らの拠点に戻って彼らを埋葬し、それから10年間、劇団を維持するべく奮闘しました。その後の5年間は、私たちは飢餓という名のダイエットを行いました。私はキッチン係を務め、1つのグループはブドウやリンゴを摘み、もう1つのグループはリハーサルを繰り返す。そうやって私たちは生き延びました。重要なことは、ロイのワークを私たちが強く信じていたということです。だからそれだけ過酷な状況でも、私たちは続ける事ができたのです。家を温めるセントラルヒーターがなかったので、最初の数年はとても寒かったですね。南仏というと光り輝くようなイメージがあるけど、全然そんなものではなかった。

そして私はある時ロイ・ハートシアターを完全に辞め、無一文になってロンドンのビクトリア・ステーションに小さなカバン1つで降り立ちました。私の唯一の持ち物は、ロイとやり続けたワーク、私の人生を変えたこのワークだけでした。私の胸にあったのは、このワークを必要としている人に提供したいという強い思いでした。とはいえどうすればいいのか全く分からなかったんですけどね。当時はまだ、普通の人でもアクセスできるようなワークではなかったのです。強烈すぎて、そんな簡単に「やって」と言えるようなものではなかったんですけどね。それからバーミンガム大学の演劇科で研

究の機会を与えられ、8年を過ごしました。そこでは、ロイのワークを古典劇に取り入れることができるかについて研究しました。学生のフィードバックから、ワークの中で機能しているものと機能していないものが分かったので、その度に改良を加えました。このワークはそのようにして、実践的に築き上げられたものなのです。

わたしはワークに30年間取り組み、ヨーロッパ中を回りました。スカンジナビアの演劇学校、スコットランド、アイスランド……もちろん外国に行った時は、英語ではなく現地の言葉でワークします。英語だけではなく、他の言語でもこのワークが通用するかということを確認めたかったのです。30年間ワークを続け、私は他の言語にも通用すると確信しました。そして、ロランとAfdas（アフダス。フランスの、俳優を含む職業訓練保険機構）を通して出会い、夏に役者向けの国際的なワークショップを開こうと決めました。私たちはあまりにも隔離されておりバラバラであると感じます。イギリスの俳優やスウェーデンの俳優、ドイツの俳優、フランスの俳優と、いろいろな国の俳優が混ざり合うことが私はとても重要だと思っています。

私は25年間、全て実費で、誰からもお金をもらわずワークショップをやってきました。私は教えて得た収入を、ワークに還元してきました。誰かから資金を得たりしたことは一切ないんです。ロンドンでもこのようなワークショップを行っていたのですが、ある日私の家に、アフダスからの履歴書が送られて来ました。私はロランの写真を一目みた瞬間、彼と一緒に仕事をすると確信しました。そしてロランはロンドンに来て私のワークショップを受け、それから15年間一緒に仕事をし、やがて彼はフランスでもこのワークを広めるようになったのです。

○**ロラン** 先ほどナディーンが「ロイ・ハートに出会った時ものすごい衝撃だった」と言いましたが、自分にとってはナディーンがそういう存在でした。

○**ナディーン** 私とロランは一緒に長く旅をしてきたけれど、もちろんロランにはロランの旅があると思う。ここにいる皆さんがそうであるように。私は有名人になりたいわけではないんです。カリスマ的な人物にはなりたくない。みんな自由だと思っています。誰も神になんてなれない。これはとても重要なことです。そしてロランは（山上）優に出会い、日本に来るといって彼の旅をした。そして私はロランの自宅で優に会って、優が私も日本に来てロランと一緒にワークショップをしたらどうかと言ってくれたのです。私は優に、そしてこの機会に本当に感謝しているんです。

私は30年間このワークをし続けたけれど、日本人の俳優が自分のルーツに対して持っている強いつながりは強烈だと思いました。とても素晴らしい。それぐらい自分のルーツとの強い繋がりを持っているのは、スカンジナビアの人ぐらい。想像力の泉とちゃんと繋がっている。それはスピリチュアルな泉でもあるんです。これは親切で言うるわけではなく、客観視した上での意見です。ロランは知っていますが、別に私はい

い人ではありませんし、お世辞は言いません。正直にそう思いました。私のような外国人の視点から自分を理解するということはとても重要だと思います。自身の文化の中にいると分からないから。今回、ワークショップで参加者とワークをシェアすることができて、今日来てくださった皆さんとこの場を共有できてとても嬉しい。これは私にとって本当に大きなことです。

○和田 ロランさんがナディーンさんに出会ったときの衝撃というのは、ボイスのワークから受けた衝撃ということだと思うのですが、具体的にどういう方向性を感じて衝撃を受けたのかという点をもう少しお話頂けますか？



○ロラン フランスでは芸術家の社会的地位が非常にしっかりと守られていて、アフダスという俳優のための制度があり、仕事のない期間国の補助を受け、ほぼ無料に近い金額で自分のスキルアップのための様々なワークショップを受けられるという仕組みがあります。それによって私はナディーンと出会い、ワークショップを受けました。そしてほぼ10年間毎年、ナディーンと一緒にワークをするという機会に恵まれたのです。

フランスの演劇は、身体を使うというより、喋りまくる演劇、とでも言いましょうか。当時僕はまだ俳優としても活動していたのですが、ナディーンの手法は、演出にも使える手法だということを感じました。そして彼女のワークを他の俳優と一緒にやるとき、身体を支える視点というのが非常に大事だということに気づいたのです。演出家としても、毎朝、稽古の最初にはまず声のエクササイズを行います。このワークショップでやったように、ウォーミングアップをやって、発声をして、それからその声を使ってテキストに入り、それを演出するという手法です。このやり方を始めてから、俄然台詞がよく聞こえてくるようになりました。

今回のワークショップでも皆さんが感じたように、台詞の声がテキストを支えている。だから声について学ぶことはとても興味深いし重要なのです。それは演出上でも、とても強いものと結びついている。よく演出家は「こんなイメージで」とか、「こんな方向でやってみよう」などと言いますが、それが本当にその役者に合っているのか。本来ならばそれは、劇団であれ何であれ、演出家と俳優と一緒にクリエイションするものです。

○和田 具体的に言うと、今回、ウォーミングアップの後に、2つの「男性の声の要素」と2つの「女性の声の要素」の発声をやられていました。この方法はどこにでもある

ものなのでしょうか？

○**ナディーン** それはアルフレッド・ヴォルフソンのワークから直接取り入れた箇所ですね。男性エネルギーから女性エネルギーに移行するということをやったんです。1人の人間が、自分の持っている男性エネルギーと女性エネルギーの両方を探求する。それがどう合体するのか。2つが合体して初めて1人の人間が出来上がるんですね。ロイとアルフレッドは音楽的言語を使いました。バリトン、テナーとか、アルト、ソプラノとか。だけどバーミンガムの学生とワークをした時に、「バリトンと言われてもよく分からない」と言われたので一般の人が理解しやすい表現に変えたんです。

「深い男性の声」「胸部に共鳴する男性の声」「女性の低い声」「女性の頭部に共鳴する高い声」という風に。ワークショップの中では、4つの異なる音質を、互いに出して聴き合うということをやリ、4つの音質を全てカバーするまで1つひとつ探っていきました。1日の初めは2人1組で呼吸法をやるのですが、身体の中に宿る音を歌声に乗せていきます。そしてそれをテキストに取り入れるということをやっていきます。

○**和田** 最初の日にお話ししたのですが、日本の女性は、世界的にみて高い声を使っていると言われてるんですね。それは女性的なイメージに閉じ込められているからで、本当はもっと違う声を身体の中に持っているのではないかと思います。このワークショップで面白いと思ったのが、女性も男性も、声を徹底的に低いところまで持って行って、それから徹底的に高いところへ持っていく。そして音が外れることは気にするなと。そこが素晴らしいと思った。要するに、音を外れるのを気にすると、自分で規制してしまう。

ここからは私の印象なんですけど、初日、みんなすごい声を出していたんですね。これは要するに、まずみんなで赤ん坊に戻ろうということだと思った。きっと怖いと思うんですね。大人が子供みたいに人前でワーッと声を出すっていうのは。そういうことも考えていらっしゃるでしょうか。「赤ん坊に戻る」みたいなことは。

○**ナディーン** 赤ん坊に戻ることが目的ではありませんが、自然に起こることなんです。ボイスワークをやると、自ずと自分の幼少時代に戻ってしまうんです。何かしらの理由で感情を止めてしまった幼少期に。大体みんな7歳ぐらいがそうなんですけど、家庭が複雑だったり、何かトラウマがあったり。このワークでは、感情が何かしらの原因で閉ざされてしまったその時に戻るんです。芸術的な意識によって、その閉ざしてしまった部分が何故か開かれるワークです。同時に、これはセラピーではありません。

○**ロラン** 言い方を変えれば、自分の内的な存在としてある幼児性に立ち返ること。そしてそれを、自分に許してあげるということです。